

さらば、神よ 科学こそが道を作る

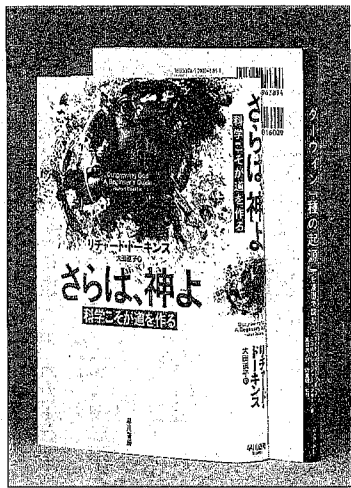
リチャード・ドーキンス〈著〉

大田直子訳 早川書房 2530円

ダーウィン『種の起源』を漫画で読む

チャールズ・ダーウィン〈文〉 マイケル・ケラー〈編・文〉

ニコル・レージャー・フラー〈絵〉 夏目大訳 佐倉統監修 いそっぶ社 1760円



Richard Dawkins 41年
生まれ。生物学者・作家。
英国王立協会フェロー。著
書に『神は妄想である』『利
己的な遺伝子』『進化とは何
か』など▽Charles Darwin
1809～82年。1859年に『種
の起源』を出版。

反進化論を問いたただす信念と勇氣

リチャード・ドーキンスは『利己的な遺伝子』『神は妄想である』などの世界的ベストセラーで知られる進化生物学者だ。特に、自然界は人智を超えた「何者か」によって創造されたとするインテリジェント・デザイン説を痛切に批判し続けている。本書は、高校生から大学生程度の若者を念頭に、時にユーモアを交えながら、宗教の非科学性を一刀両断にする。

「第一部『さらば、神よ』では、聖書にちりばめられた非論理性記述に厳しくツッコムことで、それを無批判に受け入れる危険性を指摘する。聖書を原理主義的信じる人がほとんどいない日本では、むしろ大人気な印象すら与えかねないほどの舌鋒の鋭さだ。一方でそれは、「神」という名のもとに非科学的な主張を信じ込んで、込まされている(無垢な)人々が世界中に存在するという現状の裏返しでもある。信教の自由は保障されるべきだ。しかし、だからといって、現代社会を支える科学を企めたり否定したりする行為を容認してはならない。南太平洋のバヌアツ共和国タンナ島では、1974年に英国フィリップ王配が訪問して以来、彼を「神」として崇める信仰が誕生し、継承されている。この衝撃的な例は、宗教の基盤を鋭く問いかける。歴史的な偶然によって誕生した宗教の数々と、必然に裏打ちされた科学の体系の深さは、歴然とした質的違いがあるのだ。かつては学校で進化論を教えることを禁止する法律すら存在し、今でも約4割の国民が進化論を信じていない米国の状況は、誤った宗教観から科学を守る重要性を示す。政治家や官僚に代表される日本人の平均的科学リテラシーの低下を考えると、決して対岸の火事ではない。とはいえ、科学のため誤った宗教観を正す行動を起すには確固たる信念と勇氣が必要だ。ドーキンスはその二つを兼ね備えた稀有な学者である。巻頭のカラー口絵で紹介される生物が見せる驚異的な姿の数々、特にオーストラリアのシロアリ塚とガウディの設計したバルセロナのサグラダファミリア教会が全くのうら二つに見える事実には唖然とさせられる。しかし、それらですら、科学が合理的に説明してくれることを示すが、第2部「進化とその先」だ。この後半こそ、科学とりわけ進化論の擁護者である著者の面目躍如たる部分だ。ところで、この機会に進化論をもっと知りたいと思われたなら『ダーウィン「種の起源」を漫画で読む』をお薦めしたい。原著の章立てを忠実に再現しつつ、カラーイラストを駆使して解説する構成は、私のように生物学に詳しくない一般読者にぴったりのダーウィン進化論入門書である。

評・須藤 靖

東京大学教授・宇宙物理学

情報フォルダー

▼社会の中で考え、意思決定するのはどういふことか。『16歳からのほじめてのゲーム理論』(鎌田雄一郎著、ダイヤモンド社・1760円)は、ネズミの親子が登場する六つの物語と一つの小話を通じて、ゲーム理論のエッセンスを伝える。戦略的投票や価格競争といった「元ネタ」が物語の後に明かされ、学問の世界も垣間見える。

▼『宮沢賢治の地学読本』(宮沢賢治作、柴山元彦編、創元社・2420円)は、賢治の地学シリーズ第3弾。「イギリス海岸」「グスコップドリの伝記」など地学の観点からすぐれた5作品を全文掲載し、高校の地学教師を長年務めた編者が解説を添えた。文学を通して地質や火山、気象など地学の面白さに触れられる一冊だ。

▼『ペペロンチーノ、トムヤムクン、麻婆豆腐、キムチ……私たちが毎日のように口にしているあの香辛料について』(とうがらしの世界)(松島憲一著、講談社選書メチエ・1870円)は科学と食文化の両面から切り込む。故郷の中南米から欧州、アフリカ、アジアを巡るトウガラシ紀行を読むと、口の中が熱くなってくる。